

第 29 回フェスタ・ヨコハマ記念講演会報告

「横浜市歌と作曲家 南 能衛」

報告者：万場由美子

日時：2015年9月6日（日）10時～11時半

場所：第8、9講義室

講師：南 次郎氏

《講師略歴》昭和29年7月17日生まれ。60歳

慶應義塾大学法学部卒、同大学院法学研究科修士

昭和54年 日本放送協会に記者として報道局社会部、科学文化部
などで主に科学技術や宇宙開発の取材を担当。

平成25年定年退職

現在放送大学放送部にて 考査専門職として勤務

講演のテーマ、「横浜市歌の作曲家、南 能衛」氏の孫にあたる

午前10時、サークル協議会の木下会長の開会の挨拶を皮切りに 記念講演会が開始された。
講師の南氏は 自己紹介もそこそこに まず 標題の実際の「横浜市歌」を聞くことを提案し、
プロジェクターに 歌詞が映し出された



↑ 木下サークル協議会会長の開会の挨拶

歌が始まると 会場のあちこちから 一緒に口ずさむ声
が聞こえ、「横浜市民なら歌える」という説の実証ともなっ
た。 横浜では 国歌よりも市歌の方が知られている、
という仮説が成立しそうな会場の雰囲気であった。

横浜市歌 作詞 森林太郎(森鷗外) 作曲 南能衛

わが日の本は島国よ

朝日かがよう

連なりそばだつ島々なれば

あらゆる国より舟こそ通え

されば港の数多かれど
この横浜に まさるあらめや
むかし思えば とま屋の煙
ちらりほらりと立てりしところ

今はもも舟もも千舟
泊まるところぞ見よや
果てなく栄えて行くらんみ代を
飾る宝も入りくる港



南能衛の略歴は明治14年7月19日徳島県富田浦町で誕生し、唱歌には10歳のころ徳島の高等小学校で初めて出会っている。そのころは「日本の唱歌の父」と呼ばれていた伊澤修二が小学唱歌集を出してから10年ほど経った頃である。

伊澤修二はメーソンと共に明治初期、西洋音楽を日本に導入する流れの第1期に位置する音楽家である。

そのころの唱歌はほとんどがやさしい旋律の讚美歌を曲に使い花鳥風月や忠君愛国のような言葉を歌詞にしていたらしい。



南能衛は明治31年、徳島県師範学校に入学、34年に卒業し、東京音楽学校甲種師範科に入学。37年に東京音楽学校を卒業の後、徳島に戻り、徳島中学校の教諭に採用されたのも束の間、和歌山県師範学校へ移っている。南次郎氏によると南家は代々徳島藩で家老を務める120石取の武士だったそうで「潔さを旨とする」家風に育ったせいで意志を曲げず校長などと衝突をして退職をしたのではないかと推測されると話されていた。そうであれば侍魂を持つ作曲家・南能衛という別の一面を垣間見ることが出来る。

明治33年ごろ、南能衛の徳島師範学校時代、鳥取の音楽家田村虎蔵が小学唱歌の歌詞の難解さから言文一致の唱歌集を出版し、教育界に影響を与えていた。田村虎蔵の作曲をした曲に「きんたろう」、「だいこくさま」、「一寸法師」、「はなさかじじい」、「うらしまたろう」など現代でも親しまれている童謡が多くある。

この田村虎蔵の言文一致の唱歌運動時期を西洋音楽の日本への導入の第2期とし、唱歌として長く後世に残る理由は言文一致とヨナ抜き音階にあるようだ。

ヨナ抜き音階とは「四七抜き音階」であり、ドから数えて四つ目のファと、七つ目のシが無い音階のことで「ドレミソラ」の音階を言う。これは日本音階の特徴らしいが西洋においても「蛍の光」や「故郷の空」の原曲はヨナ抜きであり五つしか音を使わないため親しみやすく、覚えやすいという特徴があり、現在でも演歌はヨナ抜きが主流だそうだ。

南能衛は和歌山師範学校の教師時代、混声合唱団を作り、遠征公演など行い、名声が東京まで聞こえたのか、明治41年に東京音楽学校の講師に招聘されている。その後、助教授になり唱歌編纂掛編纂員や小学唱歌教科書編纂委員を拝命している。このころは西洋音楽の日本導入の第3期としてヨナ抜き音階でなく西洋音階で日本の曲が作られている。特に滝廉太郎、島崎赤太郎、岡野貞一らが西洋音楽に力を入れていたらしい。

この唱歌編纂掛拝命の時期（明治42年）横浜市より横浜港開港50周年の記念祝祭に「横浜市歌」作曲の依頼が南能衛のもとに来る。森林太郎（森鷗外）の歌詞は周知されているが 作詞が届かず、南能衛が作曲を先にし、あとから森林太郎が詩をつけることとなった、と南次郎氏が話されていた。

「横浜市歌」を作曲したのち、すべての役職を退き（この時も家風の潔さが出たらしい）オルガン制作に従事。「南オルガン」と呼ばれて現存しているオルガン（スクリーンより）を見るととてもおしゃれで装飾も凝っていて 家具を思わせる素敵なオルガンであった。



←講師の話聞く会場の風景

しかしオルガン制作会社の倒産で大正7年台湾へ渡っている。この地においても 台南師範学校で音楽教育の傍ら、台南交響楽団を作り音楽に対する情熱はどこの地においても持ち続けていたことがうかがわれる。

南能衛は西洋音楽の素晴らしさを日本の子供たちに教えたい、という思いを持っていたらしい。

南能衛の作曲した童謡、唱歌は 作詞、作曲不詳とされるものの中にあるらしく南次郎氏によると「むらまつり」、「ちゃつみ」、「きしゃ」などが 祖父、南能衛作曲であると南家では考えていると 話されていた。



「横浜市歌」の導入から童謡、唱歌の



懐かしさを感じ

る分野まで話が及んだ。南次郎氏のお父様の「南能衛を書き残して欲しい」という遺言を実行されるべく 一冊の本にまとめられた氏の思いも私たちに届き、会場はほのぼのとした雰囲気にも包まれた。

余談であるが講演の後のミニピアノコンサートのピアニスト、新井先生も会場に姿を見せられ、秋からの後期面接授業に「日本の童謡・唱歌を歌う」という授業を担当される。もしかしたら南能衛の童謡も教材に採用されるのではないかという期待を込めてこの開催記をとじることにする。